

12. 心の哲学

- (1) 心の哲学とは
- (2) テーマの例
- (3) 心の哲学を超えて

(1) 心の哲学とは Philosophy of Mind

- 心とは何か、意識とは何か、いわゆる「心身問題」などを探求する分野。
- 「**認知心理学のフレイバー**」がある。
- 認知哲学とも訳される。
- たとえば、「心とは何か」という問題を「ロボットは心を持つことができるか」という問いを通じて考察する。

(2) テーマの例

- ① ロボットは心を持つことができるか
- ② チューリング・テスト
- ③ 中国語の部屋
- ④ フレーム問題
- ⑤ クオリア

① ロボットは心を持つことができるか

- この問いに答えるためには、「心」や「私」という概念を明確にする必要がある。
- 「**物理主義**」＝私は巨大な分子機械である。
- したがって、私を構成する物質を分析し、同じものを作ることが原理的には可能である。
- 私のコピーが制作可能なら、私は不死である。
- 私に心があるなら、ロボットにも心はあり得る。

① ロボットは心を持つことができるか

- 「**メンタリズム**」＝「私」は物理的体以上の何かを含む。心は物理法則とは異なる法則に従う。
- ということは、私は物理法則を超越しており、不死である。
- また「心の法則」が解明できれば、それを物理存在に入れ込むことが可能かもしれない。
- それならば、ロボットに心を持たせることはできる。

② チューリング・テスト

- ある機械が「本当の」人工知能であることを確認するテスト。
- 人間と区別のつかない応答をすれば合格。
- もしそういう機械があれば、それは人間そのものとどこもかわらない。(＝行動主義)
- 我々は他者の心の存在にも行動主義的根拠しか持たない。
- だから、機械の「内面生活」を否定するなら、それは「独我論」の肯定である。

③ 中国語の部屋

- Searle, John. R. (1980) *Minds, brains, and programs. Behavioral and Brain Sciences 3 (3): 417-457.*

人工知能批判の思考実験:

- 中国語のできない人を小部屋に入れる。
- 部屋の中には中国語の完璧なマニュアルがある。
- 外部から中国語のメッセージを入力する。
- 中の人は、そのメッセージをマニュアルにしたがって機械的に「処理」し、中国語の解答を出力する。
- 部屋の外からは、部屋の中の人は中国語を「理解」しているように見える。しかしそこには本当の「意味理解」はない。

④ フレーム問題

- Dennett(1984):人工知能批判
- ロボットは、現実には起こりうる問題の全てに対処することができない。
- 洞窟の中に、ロボットを動かすバッテリーがあり、その上に時限爆弾が仕掛けられている。
- 問題: 洞窟からバッテリーを取り出してこること。
- 1号機は、無事にバッテリーを取り出すことができた。
- しかし、洞窟から出た後に爆弾が爆発してしまった。
- つまり副次的に発生する事項(バッテリーを取り出すと爆弾も同時に運んでしまうこと)について理解していなかった。

④ フレーム問題

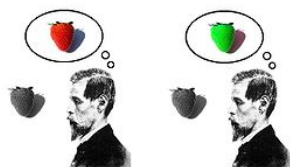
- そこで、副次的に発生する事項も考慮する2号機を開発した。
- しかし2号機は、洞窟に入ってバッテリーの前に来たところで動作しなくなり、そのまま時限爆弾が作動して吹っ飛んでしまった。
- 副次的に発生するあらゆる事項を考え、無限に思考し続けてしまった。

⑤ クオリア

- Qualia=「感覚質」
- 赤の「赤い感じ」。700ナノメートルの光を見ると、「赤さ」を感じる。この「赤さ」がクオリアである。人が色や声やにおいや痛みなどのクオリアを感じる時、脳内に発生しているのは「電気信号」である。それがどのようにしてクオリア=意識体験になるのか。

⑤ クオリア

- 「逆転クオリア」
- 同じ刺激入力に対して他者が別のクオリアを体験していても、齟齬は生じない。
「哲学的ゾンビ」=クオリアを体験しない存在。
誰も存在に気がつかない。



まとめ

- このように心の哲学は、ロボット、人工知能などの比喩をもちいることで、人間の営みに関する古典的な問いに対して新たな視点から議論を進める。

(3)心の哲学を超えて

- 全く異なる「ころ」の理解
- 「<心>は身体の外にある」より

- ① 内面と外面
- ② 他者の心
- ③ デカルト批判
- ④ 人間は常に表出的である

① 内面と外面

- ころ＝「内面」＝他者の視線から遮蔽されている。
- 行動＝「外面」＝他者が観察可能な私の行動

しかし「勇敢な人」とは、内部に勇敢さを秘めた人ではなくて、勇敢な行動をする人である。よし笑うぞ、と内面世界で決断して笑う人などいない。

② 他者の心

- 「内面」による説明は必要なのか？
- そう考えるから「他者問題」が生じるのではないか。
- 私にははじめから内面生活があると考えから、他者の内面生活の存在が問題になるのでは。

③ デカルトの「意識」論批判

意識とは、

- (1) 私秘性を持つ。
- (2) 閉鎖世界を形成している。
- (3) 行動によって意味されるものである。(勇敢な人は内面に「勇敢さ」を持っている)

しかし

- フロイトは、ある精神科医から「統合失調症の人はなぜ自分の考えを人に知られてしまうと考えるのだろうか」と質問された。
- フロイトの答え:「問題は、なぜ人々は自分の考えを他人が知らないなどと深く信じられるようになったのか、ということ。」
＝人間の本質的な自我漏洩性の指摘。

④ 人間は常に表出的である

- 「感情」は内面性である以前に状況に対する即時的な反応である。行動が心なのである。そして、内面性は表出の制御から生まれた、とフロイトは考えた。
- 子供は何でもすぐ行動に移す。親はほとんど常にそれを抑制する。
- すると子供は嘘をつく＝私秘的な内面の形成

④ 人間は常に表出的である

- 相手の内面を知ることは、相手が抑制したものを見抜き、相手の嘘を見透かし、策略や隠蔽を見破ろうとする行為である。
- 人間は嘘や隠蔽によって内面を形成する。
- いわゆる「自我に目覚める」とはこのことか。

単純な計算さえ、「内面」だけでは不可能。

内面とは、不可思議な領域ではなく、自ら作り上げる一種の遮蔽空間である。